

# 村上春樹・『回轉木馬のデッド・ヒート』(1)

酒 井 英 行

## 1 『レーダーホーゼン』——へのばしたり縮めたりへされ続けてきた自我

「僕」にレーダーホーゼンの話をしてくれた「彼女」と「長く英語の教師をしていた」というその母親。この二人の女性性は、「僕」の位置からは等しく〈彼女〉と呼ぶしかない存在である。母親を主体化して「彼女」と呼ぶならば、レーダーホーゼンの話をした「彼女」をそれと差異化する人称代名詞は見当らず、母親との関係で娘と呼んで客体化する他ないものである。〈彼女〉という言葉が指示する女性性は、ルビンの盃のように母／娘と反転せざるを得ない。

娘が話す母親の挿話を「僕」が聞き、「僕」の語りとしてそれを再構成するという仕掛けである以上、〈彼女〉がルビンの盃の図柄のように反転するのは避けられないわけではあるが、村上春樹はその効果を積極的に生かしているのだと言わざるを得ない。『レーダーホーゼン』の母娘は血を分けた分身であるだけではないのである。生の形においても彼女たちは分身なのである。(離婚して)その後再婚することなく、英語塾の教師をしている母親と、(三十歳を過ぎて)独身で、エレクトロンの教師をしている娘。(レーダーホーゼン・ショック)を生きているのは一人母親だけではないのである。母親

に言わば偶然訪れた〈レーダーホーゼン・ショック〉を、娘はおのれの生の形として自覚的に生きているのであり、その意味において、娘のほうが深く〈レーダーホーゼン・ショック〉に傷つき、生の形を規定されているのだと言わざるを得ない。〈レーダーホーゼン・ショック〉に傷ついた母娘という分身関係を暗示する手立てとしての〈彼女〉（母／娘）の重ね合わせだったのである。

「彼女」（論を進めるに当たっては、「僕」の眼前でレーダーホーゼンの話をした娘のほうを「彼女」と呼ぶのが妥当であろう。その母親は娘の話のなかにしか出てこないのだから。）が言うとおりの、「この話のポイント」は、確かに、レーダーホーゼンにあるだろう。

「それでもし——もし、さっきの話から半ズボンの部分を抜きにして、一人の女性が旅先で自立を獲得するというだけの話だったとしたら、君はお母さんが君を捨てたことを許せたのだろうか？」

「駄目ね」と彼女は即座に答えた。「この話のポイントは半ズボンにあるのよ」  
「僕もそう思う」と僕はいった。

母親を許せたか否かの心の問題の「ポイント」になるのが「半ズボンの部分」であったことは間違いないが、「彼女」の側の心模様は後に考察するとして、ここでは、レーダーホーゼンが「ポイント」になる、母親の「旅先で自立を獲得する」話に立ち止まってみよう。

「彼女」の母親がドイツへの一人旅をしたのが五十五歳、そのとき「彼女」は大学二年生であった、母親は「長く英語の教師をしていた」という設定。英語の教師をしながら三十五歳くらいで「彼女」（一人っ子らしい）を出産したということになる。妻としての自我、母としての自我だけでは充たされない自己意識を強く持っていたであろう女性。家庭の外における自己実現を希求する女性であり、その希求をある程度現実化していたであろうことがこの設定から読み取れるであ

ろう。しかし、母親のなかでは、自我の解放感よりも、自我の被抑圧感のほうが強く意識されていたであろう。

たとえこれまでに何度かの夫婦の不和があつたにせよ、基本的には彼女の母親は我慢づよく——ある場合には想像力がいささか不足しているのではないかと思えるくらいに我慢強く——家庭を大事にする人だったし、娘のことをも溺愛していたからだ。

家庭の外への自己拡張の意思を抑圧して、妻・母親の役割に自己を閉じ込めようとしてきたのだと言えよう。過度の自己抑圧。「彼女」(娘)が考えるような「想像力がいささか不足」した女性というわけでは決してない。娘の眼にそのように見えるほどに、社会化された自我を飼ひ殺しにする、過剰な自己抑圧の責務を自らに課することによって、辛うじて役割としての自己に踏み止まっていたに違いないのだ。良き妻、良き母であろうとすることが、母親に強いたであろう自己犠牲とあきらめの大きさ……。無論、母親のなかに、社会の女性に対する抑圧を受け入れて、良き妻、良き母としての自己を最大限に評価してもらいたいという心性もあつたはずである。世間に受け入れられ、世間から評価されやすい自己に安んじる妥協心があつたであろう。いずれにせよ、良き妻、良き母として生きることが彼女の「方針」であつたと言つてよい。ドイツのレーダー・ホーゼンを売る店の男が言うように、「信用」を築くには、おのれの「方針」を長い間、例外を認めることなく頑なに守る他に道はないのである。

「店の方針なんです。方針。我々はおみえになつたお客様に体型にあつたレーダー・ホーゼンを実際にはいていただき、細かい調整をし、その上ではじめてお売りするのです。(中略)そのような方針の故に我々は信用を築いて参つたのです」

「しかし例外は認められんです。この不確かな世界の中で、信用ほど得がたくそして崩れやすいものはないのです」

この店が墨守してきた「方針」は、まさに、「彼女」の母親が五十五年間、世間のなかで守り通してきた「方針」に他ならない。母親は、「細かい調整」をすることによって、夫、娘、そして世間という「お客様」の「体型」(期待、価値観)におのれを合わせてきたのである。良き妻、良き母という「信用」を築いていくための「方針」であつたわけであるが、「この不確かな世界の中で、信用ほど得がたくそして崩れやすいものはない」のであり、母親は、その「信用」を守り続けるために、「例外は認められ」ないという頑なな態度で彼女の「方針」を貫いてきたのである。娘の眼には、それが、「想像力がいささか不足している」かのように見えたと考えるべきであろう。同じことを逆から言えば、夫と娘が自分たちの「体型」に合つたリーダーホーゼンをはくために、母親に「細かい調整」を施してきたのだと言えよう。男性中心社会に居直るおのれの「体型」に合うように、「細かい調整」を妻に施してきた夫。

だから、ドイツのリーダーホーゼンを売る店で、母親が見ていたものは、彼女自身(の姿)であつたのだと言ふべきであらう。夫に「そっくりの体型」のドイツ人に合わせるために、店の人によつて、「いろんなところをのばしたり縮めたり」されているリーダーホーゼン。母親の生の形に他ならない。彼女は旅先において、夫の「体型」に合わせるために、「いろんなところをのばしたり縮めたり」されてきた自分の生の形を凝視しているわけであるが、私は彼女の目覚めを先回りし過ぎてゐるようである。

「女関係では比較的だらしない人だつた」夫との日々。

彼女の言によれば、その頃彼女の両親の仲は比較的親密であつた。少なくとも大きな声で夜中に口論をしたり父親が腹を立てて何日か家に帰らなかつたり、ということとはなくなつていた。かつて父親に女がいた頃にはそういうことが何度もあつたのだ。

男性中心社会にあぐらをかいた夫。夫婦関係における違犯者であつた夫。夫の違犯に口論はするものの、「想像力がいさ

さか不足している」かのごとく「我慢強く」耐えてきたのである。「性格は悪くないし、きちんと仕事もする人」であつた夫への信頼からか、娘への母親の情からか、英語教師としての自己保身からかは定かではないが、とにかく、夫の違犯によつて傷ついた自我に耐えて、夫婦関係を続けたのである。「大きな声で夜中に口論したり父親が腹を立てて何日か家に帰らなかつたり」ということが無くなつたからといつて、夫婦の仲が「親密」とは言えないわけではあるが、娘の眼から見ても、そのまま仲良くやっていけそう」な夫婦関係ではあつたのだから。かつての夫の違犯に対する情念が消え去つたわけでもないし、心底「親密」であつたわけでもなからうが、「方針」の堅固さゆゑに夫へのわだかまりは心の奥底に隠されたのだと言えよう。過度に「方針」を課し続けたために、良き妻、良き母という仮面は、いつしか素顔になり、眞の自我が眠りこむ瞬間があつたかも知れない。「彼女」の母親がドイツへの一人旅に出たのはそのようなときであつた。

一人で旅をすることはなんて素晴らしいのだろう、と丸石敷きの道を辿りながら彼女は思った。考えてみればこれは彼女にとつては五十五年間の人生の中ではじめての一人旅なのだ。(中略)そしてそのような体験のひとつひとつが長いあいだ使われることなく彼女の肉体で眠っていた様々な種類の感情を呼び起こした。彼女がずっとこれまで大事なものととして抱えて生きてきた多くのものごと——夫や娘や家庭——は今はいもう地球の裏側にあつた。彼女はそれについて何ひとつ思い煩う必要はないのだ。

妻でもない、母親でもない、一人の(女性)になつてゐるのだ。一人旅という非日常的な時空のなかで、長年守り続けてきた「方針」から解放されて、「細かい調整」をする必要がなくなり、誰に合わせることもない(自分自身)が息づいてゐるのである。役柄から解放された自由な個人の蘇生。役柄が色褪せて見え、蘇生した自己のいる「全ての風景が新鮮」に見えてゐるのだ。

役柄から解放されて一人の女性になつてゐたからこそ、先程述べておいた、自分の生の形が、「いろんなところをのびし

たり縮めたり」されるレーダーホーゼンに他ならないことに気づいたわけである。「細かい調整」をされ続けてきた自分の姿に出会ったとき、思いがけない（無論、意識下では連続している）地平に連れ去られたのである。明確に言語化するこのできない情念に見舞われたのだ。

「……母にわかることは、そのレーダーホーゼンをはいた男をじっと見ていううちに父親に対する耐えがたいほどの嫌悪感が体の芯から泡のように湧きおこってきたということだけなの。彼女にはそれをどうすることもできなかったの。その人は——そのレーダーホーゼンをはいてくれた男の人は——肌の色をべつにすれば、うちの父親と本当にそっくりの体型をしていたの。脚のかたちやら、お腹のかたちやら、髪の毛の薄くなり具合までね。そしてその人が新しいレーダーホーゼンをはいていかにも楽しそうに体をゆすって笑っていたの。母はその人の姿を見ていううちに自分の中でこれまで漠然としていたひとつの思いが少しずつ明確になり固まっていくのを感じることができたの。そして母は自分がどれほど激しく夫を憎んでいるかということをはじめて知ったのよ」

おのれを「のぼしたり縮めたり」して、「体型」に合わせて身に着けて、「いかにも楽しそうに体をゆすって笑って」いる、まるで夫であるかのようなドイツ人を見ているうちに、母親のなかに、夫に対する嫌悪感が湧いてきたとしても不思議ではない。まるで男性中心社会の縮図のような店のなかで、二人の男性店員と、「冗談を言っては笑いあって」、レーダーホーゼンを調整している夫のようなドイツ人、調整されたレーダーホーゼンをはいて、「体をゆすって笑って」いる夫であるかのようなドイツ人を凝視しているうちに、母親のなかで、夫に対する激しい憎しみが点火したことは間違いないまい。日常生活のなかで、眼前に夫を見ているよりも、夫に「そっくりの体型」の別人を見ているほうが、夫をよりリアルに感じられるであろう。「体型」だけが同じの別人格の男を凝視することで、夫という存在のすべてをリアルに実感し、それに体の奥底からの生理感のこもった激しい憎しみを感じたのである。

この〈レーダーホーゼン・ショック〉が即、離婚の決意に重なるわけであり、「あなたに対してどのような形の愛情も持てなくなったからだ」と、離婚の理由が言語化されて夫に伝えられたのである。

母親の〈レーダーホーゼン・ショック〉は、娘（彼女）の生の形を規定しているのである。母親の離婚によってショックを受けた「彼女」であるが、それは、「ただ単に離婚という行為自体から受けたショック」ではなかった。「問題は母が父を捨てただけではなく、私をも捨てたということだったのよ。そのことで私はとても混乱したし、深い傷も受けたの」。そのような母を許すことができなかった「彼女」。しかし、レーダーホーゼンの話を聞いた後では、母を憎み続けることができなかつたという。「きつとそれは私たち二人が女だからだと思うの」。女性であるが故に共有できた〈レーダーホーゼン・ショック〉、と言うよりも、母の父への激しい憎悪を女性であるが故に心身に内蔵しなければならなかつたのである。結婚することでレーダーホーゼン化される生への強い拒否。理性的、意思的な拒否感よりも根深い、生理感覚に裏打ちされた拒否感であろう。独身でエレクトーンの教師を続けている「彼女」、各種のスポーツに対する姿勢はマニアックと表現してもいいくらいに情熱的な「彼女」。意識の上では結婚を望みながらも、〈レーダーホーゼン・ショック〉にそれを拒否・抑圧されてしまう分裂、アンビバレンス。「彼女が結婚できないのはそうすることを彼女が心からは望んではいなかつたから」だと言う他ないのである。意識と無意識の闘争の苦痛、理性と感情の齟齬のひずみを癒そうとする欲動がスポーツへの情熱となつて噴出しているのである。意識が無意識に阻害される心の空虚を埋めようとする促しがスポーツへの情熱として顕現するのだ、と言い換えてもよい。「彼女」のこのような生の運動は、村上春樹が、『はじめに・回転木馬のデッド・ヒート』で言うように、「回転木馬の上で仮想の敵に向けて熾烈なデッド・ヒートをくりひろげているように見える」ものなのである。

男性中心社会に居座つて、妻をレーダーホーゼン化する夫と、それを心の奥底で憎みながらも、良き妻であらうとする

「方針」を守ってきた妻の夫婦関係。「彼女」の話を聞いている「僕」は、それではどのような夫婦関係を結んでいるのであろうか。「彼女」が訪ねて来た時、「僕」の妻が留守であったという設定。不自然な設定というわけでは決していないが、妻の不在を語る口調には不自然なこだわりが感じられるのである。「彼女」の話は次のような状況のなかで語られ始めるのである。

その雨の日曜日の午後に彼女が僕の家を訪ねてきたとき、妻は買物に外出していた。彼女は約束の時間より二時間も早くやってきたのだ。

しかし映画のエンド・マークが出てしまっても妻は戻ってはこなかったのだ、僕は彼女としばらく世間話をするこ  
とになった。我々は鮫の話をし、海の話をし、泳ぎの話をした。それでもまだ妻は戻ってはこなかった。

妻の不在の空白を埋め合わせることの不可能性のなかから浮上してきたかのような「彼女」の語り。妻の不在が呼び出した語りであったと言っても過言ではない。そして、「彼女」の話が継続されることを説明する次のような「僕」の語り。  
僕は冷えてしまったコーヒーの残りを飲んだ。雨はまだ降りつづき、妻はまだ帰ってこなかった。話がこれからどんな風に展開していくのか、僕にはまったく予測がつかなかった。

妻の不在が「彼女」の語りを紡ぎ出させ、話を継続させていることは間違いないのだが、「僕」の語りには、妻に対する秘匿性、つまり、「彼女」の話が妻の不在のなかで語られなければならない、という妻に対する隠蔽を願う心が隠されていないであろうか。「彼女」の話の大筋が語り尽くされた後に妻が帰ってくるというプロット。「彼女」の母親のリーダーホーゼン体験は、妻の不在のとき、妻に聞かれない形で話されなければならない話だったのだと言う他ない。このことは、「彼女」と「彼女」とで、リーダーホーゼンの話を意味づけ、総括するときの次のような場面設定からも言えるであろう。



「それで、君はもうお母さんのことを憎んではないの？」と僕は妻が席を立ったときを見はからつて彼女にそう訊ねてみた。

妻に対する秘密性は何に由来するのであろうか。「彼女」の話を妻に対して隠蔽しなければならないのは何故であらうか。妻に対する疚しさ。「僕」とて、実は、妻の「いろんなところをのばしたり縮めたり」して、自分の「体型」に合わせて身に着けているのではないのか。男性中心社会のなかに居座つて、妻をレーダーホーゼン化していることの後ろめたさ。妻の「レーダーホーゼン・ショック」を回避したい心性。「彼女」の話を隠蔽する「僕」の心の形である。

## 2 『タクシーに乗った男』——夢の終わり／人生の始まり

「回転木馬の上」で「熾烈なデッド・ヒートをくりひろげているよう」な生の形から解放される時間が我々に訪れることがあるのだろうか。「回転木馬の上」から一時も降りることはできないのであろうか。

『回転木馬のデッド・ヒート』（講談社、一九八五年一〇月）の諸篇の主人公たち（「僕」の眼前で物語る話者、あるいは、その話者が話のなかで中心化する人物）のなかで、『タクシーに乗った男』の〈タクシーに乗った男〉にまつわる話をする「四十歳前後の女性のオウナー」だけは、例外的に、〈回転木馬のデッド・ヒート〉から解放された時間を生きているように見える。「決して美人とは言えなかったが、人の心をふとなごませてくれるようなおだやかで上品な顔つきをしている」という「彼女」。「おだやかで上品な顔つき」は生得のものというわけではあるまい。「彼女」の「人の心をふとなごませてくれる」、さりげないやさしさ・あたたかさは、「僕」がインタヴューの「いちばん重要なポイント」だと言う「愛情と理解」に通ずるであらうが、「彼女」はどのような人生行路によって、そのような心の形を獲得することができたのであ

ろうか。

生まれつき足が悪く、彼女が木貼りの床を横切ると、不揃いな足音がガランとした室内に楔のように響きわたった。

靴音さえ聞かなければ、彼女の身のこなしの中に不自然な部分はまるで見受けられなかった。

生まれつき足が悪い、という宿命的な完全性の欠損を背負わされながらも、靴音にしかその痕跡を残さない立ち居振る舞い。宿命的な不完全性を飼い慣らし、克服した生き方と「彼女」の「おだやかで上品な顔つき」とは無縁であるはずはないのだが、生れつき足が悪いという宿命は、「彼女」にどのような生の形を強いたのであろうか。

画家になるつもりで、アメリカの東部の美術大学に留学していた「彼女」。「自分の腕でものを創りだすこと」、それが「彼女」の自己実現の道であつたわけだが、足に欠損のあつた「彼女」が「腕（手）」による自己実現を夢みたのは自然である。生まれながらの欠如を埋めようとする切実な願いが、「自分の腕でものを創りだす」創造主（画家）へ駆り立てたのである。画家として成功することには並み外れた深い思い入れがあつたはずであり、その意味で、画家になることは「彼女」の（人生）のすべてであつたはずだ。いや、不完全性を身体的に抱え持つおのれを丸ごと肯定して受け入れられることを意味する恋愛、結婚も、「彼女」の強い憧れであつたに違いない。画家になる夢を追いつけ、オフ・オフ・ブロードウェイの役者」をしていた男性との恋愛、そして結婚、ここまでの「彼女」の「青春」は順風満帆であつたに違いない。若き日のアメリカで「彼女」を捉えた「すべての夢や希望や愛」が叶えられそうに思えたであろう。

しかし、絵に描いたような順風満帆な夢の実現がどこにでもあるわけではない。「彼女」はやがて「凡庸」な自己に向き合うしかなかったのである。無論、「彼女」のすべてが「凡庸」であつたわけではない。優れた「商才」の持ち主だったのだから。「自分の腕でものを創りだす」画家としての「凡庸」さ。

卒業後もそのままニューヨークに残って自活するために——あるいは自分の才能に見切りをつけたのでといってもいいんですけど——絵のバイヤーのような仕事を始めました。

「あるいは自分の才能に見切りをつけたので」という言い換えは現在の語りであって、美術大学卒業直後の「彼女」の意識では、「自活するために」（画家としての才能に見切りをつけたからではなく）止むなく「絵のバイヤーのような仕事」を始めようとしたはずである。無論、画家としての才能に半ば以上絶望はしていたであらう。しかし、もうひとつの夢、恋愛、結婚の幸せを追い求める夢を実現するため、という自己納得のうえでの画家への見切りであつたはずだ。本当の意味での見切りではなかったのだ。

彼（主人）はオフ・オフ・ブロードウェイの役者をしていたんですが、職があつたとしても、そんなのはたいした金にはなりませんでした。生活費のおおかたは私が稼いでいたんです

「彼女」の眼には、絵の中の（タクシーに乗った男）が、「ちよつとしたジゴロのようではあるが、ジゴロではない。ジゴロになるためには、彼には何か欠けている」ように見えたわけであるが、「彼女」の夫こそが実は「ジゴロ」と言つてもよい男ではなかったのか。しかし、「絵のバイヤーのような仕事」を始めたときに、夫が「ジゴロ」として意識化されていたのではあるまい。「役者」、ある意味では、自分と同様の「自分の腕でものを創りだす」芸術家である夫を愛してはいたであらう。画家としての才能に半ば絶望した「彼女」が、結婚の幸せを追い求めて、稼ぎのない夫を支えるため（「自活するため」に、「絵のバイヤーのような仕事」を始めたというのが真相であつたはずだ。「彼女」が画家としての才能に本当に見切りをつけ、夫が「ジゴロ」として意識のなかで前景化される（夫が（タクシーに乗った男）に重なる）のはもう少し後のことである。

「絵のバイヤーのような仕事」としてではなく、自分のために買うことになった（タクシーに乗った男）という題の一

枚の絵。

「チエコには表現の自由がないんです」と彼は言ったが、さしあたって彼に必要なものは表現の自由以前のものだった。ドイツ人の画学生の言うように彼には才能というものが欠けていた。「プラハに留まっているべきだったわね」と彼女は心の中でつぶやいた。

それでも「彼女」はこのチエコ人の画家の描いた「タクシーに乗った男」という絵を買ったわけであるが、「彼女」の他者に投げ掛ける冷たい視線に先ず注目しておきたい。「僕」がインタヴューの「いちばん重要なポイント」だと言う「愛情と理解」が「彼女」には欠如しているのだ。画家としての自己実現に挫折した人間の哀しみが自己化、内面化されてはいないのである。自分を特待席に置いて特権化し、他人を上から見下ろす意地悪い視線。他人の弱点、急所を抉りだす視線。「プラハに留まっているべきだったわね」という酷評が、そのまま、「日本に留まっているべきだったわね」という酷評として「彼女」に投げ返されるものであったことに気づかなかったのであろうか。この頃の「彼女」が、「人の心をふとごませてくれるようなおだやかで上品な顔つき」をしていたとは考えられない。

しかし、「プラハに留まっているべきだったわね」という呟きが、まったく無意識のうちに発せられた自己への呟きでなかったかと言え、そうではあるまい。少なくとも、その呟きは、「日本に留まっているべきだったわね」という残響となつて「彼女」の心に鳴っていたであらう。

プロの目から見れば、絵はそこで完全にストップしていた。意識の広がりというものが無いのだ。同じようにストッププしていても、それは芸術的「袋小路」<sup>カルデット</sup> までにも到っていなかった。ただの「頭打ち」<sup>ザッツ・オール</sup> だった。それだけ。

誰の絵に対する評価のつもりであらうか。仮に、「彼女」が描いていた絵を他人に評定させたならば、恐らくこれと同じ断定を下したであらう。客観的に見れば、画家としての彼女の才能、技量の極めて正確な評価であるはずなのに、そのこ

とに気づかないかのように、「彼女」はこのチェコ人の画家に自己を重ね合わせないで、彼が描いた〈タクシーに乗った男〉に自己同一化しているのである。チェコ人の画家の「凡庸」さが投影されている〈タクシーに乗った男〉である、という意味では、チェコ人の画家と〈タクシーに乗った男〉とは同一人物であると言っても過言ではないのだから、「彼女」がどちらに自己同一化していても同じことと言えば同じなのだ。描かれた男のほうに自己同一化していることには、「彼女」のなかで、真の意味での画家の才能への見切りがなされていないことが見え隠れしているであろう。チェコ人の画家から自己隔離しておきたいのだ。「彼女」が〈タクシーに乗った男〉に自己同一化していることを、作者の意図から言えば、〈タクシーに乗った男〉をポイントにした作品展開（「彼女」の精神的蘇生の物語）を仕組むためである。作品のなかで、〈タクシーに乗った男〉を前景化させねばならないのだ。

とにかく、「素人芸に毛がはえたといった程度」の、絵としては気にいらぬ絵であるのに、描かれていた「若い男」が氣に入り、「その男を眺めるために」その絵を買ったのである。「その絵の男」は「彼女」自身の「失われてしまった人生の一部」であるように思えたのである。「失われてしまった人生の一部」と言うことが可能なのは、「去年の夏」のアテネにおける蘇生の後の「彼女」であるはずだ。宿命的な欠損感を補填するために追い求めた「すべての夢や希望や愛」に挫折したのであるから、絵を買ったときの「彼女」には、「人生のすべて」が失われてしまった、と思えていたはずである。

「あまりにも長くそのタクシーに乗った男を眺めていたせいで、彼はいつの間にか私にとっての分身のような存在になりました。彼には私の氣持がわかりました。私には彼の氣持がわかりました。私には彼の哀しみがわかりました。

彼は凡庸という名のタクシーの中に閉じこめられていました。彼はそこから抜け出すことができませんでした。永遠にです。本当の永遠です。凡庸さが彼をそこに生ぜしめ、そして凡庸な背景の檻の中に埋めこんだのです。哀しいことだと思ひになりませんか？」

「彼女」がいみじくも言っているように、絵の男はまさに「彼女」の「分身」と言う他ない存在である。「素人芸に毛がはえたといった程度」の技量で描いた「彼女」自身の自画像であると言っても過言ではないのだ。いや、その程度の技量の「彼女」が描いた夫の肖像画だと言うべきであろうか。その絵の男の顔は、「彼女」の心のなかで、ルビンの盃のように、「彼女」自身の顔と夫の顔に反転していたであろう。我々の多くがそうであるように、「彼女」やその夫もまた、実現することなく挫折する夢を追求めるだけの「凡庸」な生を生きているのだ。「哀しい」ことではあるが、それが「凡庸」な人間の人生なのである。「凡庸」という名のタクシーとは、だから、何かの夢に囚われた「凡庸」な人間の人生に他ならないのだ。実現することなく挫折する夢を虚しく追い求めることしかできないのだ。

《タクシーに乗った男》に向き合っていた三年間は、「絵のバイヤーのような仕事」に転向したときの思いを内面化する時間であつたはずだ。「自分の才能に見切りをつけた」つもり「彼女」のなかでくすぶり続けていた画家への夢。「凡庸」という檻から永遠に抜け出せない絵の男に完全に自己同一化したとき、「見切り」を心身の奥底に回収し得たのである。その時間は同時に、「彼女」の夫を《タクシーに乗った男》に重ね合わせる時間でもあつたはずだ。「職にあぶれ」がちの、「生活費のおおかた」を妻の稼ぎに頼っていた、「役者」としては三流であつた夫。夫の「役者」としての才能に「見切り」をつけることは、「ジゴロのよう」に見える《タクシーに乗った男》に夫を重ねることを意味するであろう。《タクシーに乗った男》に向き合っていた三年間は、夫を「ジゴロ」として前景化する時間でもあつたのである。

したがって、「何もかもを捨てよう」と思って、《タクシーに乗った男》の絵を焼いたとき、画家になるという自己実現の夢も、性的存在としての夫婦関係における愛情の夢も捨て去つたはずである。「彼女」の「青春」を捉えた「すべての夢や希望や愛」から決別したはずである。はずである、と言つたのは、《タクシーに乗った男》の話はここで終わっていないからである。その終わっていない物語のなかにこそ、《タクシーに乗った男》にまつわる話の「貴重な教訓」があるのだと

「彼女」は言うのである。

「人は何かを消し去ることはできない——消え去るのを待つしかない、ということですよ」

「彼女」にこのような「貴重な教訓」をもたらした、絵を焼いたときからおよそ十年後の「去年の夏」のアテネでの出来事。「アテネの街のタクシーの中で絵の中の男と隣りあわせに座」という「まったくの偶然」の出来事。絵の中ではない、現実の「凡庸という名のタクシー」をくぐり抜けたとき、そのタクシーが「彼女自身の一部」を運び去ってくれたのである。「彼女」の「凡庸」さが生ぜしめた「すべての夢や希望や愛」を、「凡庸という名のタクシー」が運び去ってくれたのである。絵を焼くという意志的な行為によってはなし得なかったことを「まったくの偶然」の出来事が果たしてくれたのである。まさに、「消え去るのを待つしかない」のであるが、それは意識的な生の無力さの体験というよりも、生きるということの奥深さを思い知る体験であつただろう。

「彼が私に向つて言つた最後のことは私の耳にまだはつきりと焼きついています。『カロ・タクシー——よいご旅行を』」そう言つて彼女は膝の上で両手をあわせた。「素敵なことばだと思いませんか？ そのことばを思い出すたびに私はこんな風に思うんです。私の人生は既に多くの部分を失つてしまつたけれど、それはひとつの部分を終えたというだけのことであつて、まだこれから先何かをそこから得ることができるはずだつてね」

現実の《タクシーに乗つた男》から「よいご旅行を」と言われたとき、絵を焼くことによつて捨て去つたと思つていた「すべての夢や希望や愛」を「彼女自身の一部」と思へたはずである。虚しい夢に囚われた「凡庸」な人生は確かに終わったかも知れないが、新しい別の自己を生きることもまた確かな人生なのであり、そこにも夢はあるのだ。

「ちよつとしたジゴロのよう」に見えた絵の中の《タクシーに乗つた男》、彼は実は、「ギリシャ国立劇場の俳優」であつたのだ。「彼女」の意識のなかで「ジゴロ」として前景化されていた「役者」であつた夫、彼もまた優れた俳優であつたか

も知れないではないか、いや、今は優れた俳優になつてゐるかも知れないではないか。絵の男と隣り合わせたとき、「彼女」のなかにこのような思いが駆け巡つたであろう。「彼女」の心の世界のドラマ、別れた夫との和解、嫌惡的な別れから愛情的な別れへの転化があつたはずである。女性としての「青春」の夢の昇華をも意味してゐるであろう。

〈タクシーに乗つた男〉を巡る長い時間が、そして、「人は何かを消し去ることはできない——消え去るのを待つしかない」という「貴重な教訓」が、「人の心をふとなごませてくれるようなおだやかで上品な顔つき」を形作つたのだ。「仮想の敵に向けて熾烈なデッド・ヒートをくりひろげている」「回轉木馬の上」から降りることができた人の表情であつたのである。

### 3 『プールサイド』——スポーツ／人生

作品の題名である〈プールサイド〉が、「彼」が「僕」に『プールサイド』の話をする場所を指し示していることは確かであろう。「彼はある会員制のスポーツ・クラブのプールサイドにあるカフェテラスで、僕にこの話をした」のであるから。しかし、〈プールサイド〉は、ただ単に「彼」が「この話」をする場所であるだけではない。「この話」を「どうしても誰かに聞いてもらいたい」という切実な思いを抱かざるを得なくなつた「彼」の人生の位相を象徴してゐるのである。

「中学校に入つてから大学を卒業するまでの十年近くをトップクラスの水泳選手として送つた」という「彼」。「私立の一流中学から同じ系列の高校へ、そして大学へとエスカレーター式にあがつていった」「彼」にとつて、水泳は何かの手段であつたのではあるまい。より良い学校、一流企業に入るため、といった功利的なスポーツではなかつたのである。「エスカレーター式」にあがつていける「一流中学」に既に入つていたのだし、「いつもトップクラスに近い成績」をとつていた



のに、「誰も名前を聞いたことがないような小さな教材販売会社」に就職したのだから。スポーツの純粋性。より早く泳ぐことだけを目的化した身体の燃焼である。そのこと自体は青春期の生の形として少しも不思議なものであるわけではない。「水泳というスポーツ」（に限ったことではないが）は、到達すべき空間的距離の定められた、動かないゴールのあるスポーツである。泳げば泳いだ分だけ確実にそのゴールまでの距離は縮小されていき、前に進むことによって必ずそのゴールに辿り着くことが可能なのである。決められたコースを、コース・ロープに沿って、二本のコース・ロープの間からはみ出すことなく泳げばよいのである。自律的な、心身ともに他者と触れ合うことのない、本質的には自己完結したスポーツと言ってよいであろう。四百メートルの選手であった「彼」は、本質的には他者が存在しない自己完結した世界で心身の限界に挑戦し続けていたのである。

「水の中であるときには嘔吐し肉を痙攣させながらも最後の50メートルを全力で泳ぎきる」ことができたのは、「距離の細分化にあわせて、意志もまた細分化される」という、誰から教えられたのでもない「彼」独自の「分割方式」という考え方によってであった。「トップクラスの水泳選手」であったわけだから、水泳競技においては（「50メートル・プールの中」では）、「彼」の「分割方式」という認識は有効だったと言う他ない。しかし、プールの外の人生もプールの中と同じように泳げるのであろうか。そのことを問う前に、「彼」は先に述べたような本質的な他者を持たない「水泳というスポーツ」を何故始めたのであろうか、このことを先ず問うてみよう。

兄が一人、あとになって五歳下の妹が生まれた。父親はもともとは中堅クラスの不動産業者だったが、後に中央線沿線を中心とした貸ビル業に進出して、60年代の高度成長期にはかなりの成功を収めた。彼が14歳の時に両親が離婚したが、複雑な事情があつて子供たちは三人とも父親の家にとどまった。

『プールサイド』において記述されている「彼」の家族関係のすべてである。輪郭だけに削ぎ落とされた情報という他

ない。凝縮して記されたこの家庭環境のなかで、思春期の「彼」はいかなる思いを胸に日々を過ごしたのであろうか。過剰な意味づけは慎まなければならないが、思春期の「彼」が深く動揺し、心の奥深くまで傷ついたであろうことは想像に難くない。離婚という決着に至る両親の心理的葛藤、兄弟三人とも父親のもとに留まることになった「複雑な事情」に潜んでいたはずの両親の何か、それは「彼」が認めたくない、眼を背けたいものであっただろう。人間関係が抱え持つドロドロした情念、愛憎の心を忌避したはずだ。深く傷ついた思春期の心と、先に述べたような「水泳というスポーツ」を中学校の頃から始めたこととは無関係であつたはずはないであろう。人間同士の関係性への不信任感、他者と関係を結ぶことへの不安感、忌避感が、「水泳というスポーツ」に向かわせたのだと思われぬ。

そして週に5日はプールで泳ぎ、残りの2日を女の子とのデートにあてた。それほど派手に遊びまわりはしなかったものの、遊び相手に不自由したこともなかった。結婚の約束をさせられるまで深く、一人の女の子とつきあうこともなかった。マリファナも吸ったし、友だちに誘われてデモにかけたこともあった。勉強というほどの勉強をしたわけではないが、それでも講義にだけはきちんと出席していたから人並み以上の成績を残すことができた。

「分割方式」という認識方法によって、プールの中（コース・ロープの間）を「全力で泳ぎきる」ことのできた「彼」が、プールの外の人生をいかに泳いだと見るべきであろうか。見かけは全力の力泳とは言えまい。何事にも全力を出し切ることもない中途半端な生き方のように見えるかも知れない。スケジュールを機械的にこなすだけのロボットとも言える。しかし、それは容易なことではないのである。自らを律することのできる極度の几帳面さ、意志の過剰さ無くしてできる生き方ではあるまい。何事にも溺れず、我を忘れない克己心。プールの外の人生をも全力で泳いでいるのだと言わざるを得ない。「彼」はまさに泳いでいるのだ、プールの中と同様に水面（表面）を。プールの中で、水底に足を降ろすことなく、水面を泳ぐのと同じように、人生の表層を全力で泳いでいるのである。両親が垣間見せた関係性の葛藤を回避するかのよ

うに、人間関係の水底に降り立つことなく、関係性の表面だけを泳いでいるのだ。

まわりの多くの人々はそんな彼の性格をうまく把握することができなかった。彼の家族にしても、友だちにしても、つきあった女の子たちにしてもそうだった。彼が心の底で何を考えているのか、誰にもよく理解できなかった。

生きた人間関係を回避し、「心の底」に眼をふさぐとする「彼」、それでいて関係性の水面を全力で泳ぎきる「彼」、そんな「彼」を誰も理解できなかったのは当然かも知れない。周囲から理解されない苦悩はさして無かったであろう、「彼」自らが他者との生きた関係性を求めていなかったのだから。しかし、水面を全力で泳ぐロボットであるかのようなおのれの空虚さを心のどこにも感じていなかったわけではないはずだ。

「小さな教材販売会社」に就職した「彼」には、「もちろんそれなりの目算」があったのであり、「二年後に彼は圧倒的な成功を収める」ことができたのである。「彼は30になる前に、実質的には重役の権限を持つようになった。年収は同年代の誰よりも多かった」のである。「すべては彼の計算どおり」に運んだのである。会社の中でも、「彼」は「50メートル・プール」の中と同じように泳いだと言う他ない。「50メートル・プール」の中で学んだことを、会社の仕事という人生に応用したに過ぎない。「分割方式」という「きちんとした形をとった認識」によって、プールの外の人生をも「フルスピードで泳」いだのである。会社の仕事は、「水泳というスポーツ」ほどには、他者の存在を排除できないであろうし、コース・ロープという直線に沿って行けばよいものでもあるまい。しかし、「彼」が「圧倒的な成功を収める」ことができたのは、「分割方式」という認識、自らを強く律する克己心によるだけではあるまい。仕事を仕事として割り切る、言わば、「水の底」に足を降ろさずに水面を泳ぐ水泳競技と同じやり方であったからだろう。とにかく、「彼」は会社員としての人生も、「50メートル・プール」と同様に「フルスピード」で泳げたのである。

「二年前からつきあっていた五つ歳下の女性」と、二十九歳のときに結婚した「彼」。

結婚生活にも何ひとつとして問題はなかった。二人はお互いのことをとても気に入っていたし、共同生活はきわめてスムーズに運んだ。彼は働くのが好きだったし、彼女は家事をするのが好きだったし、どちらも遊ぶのはもっと好きだった。何組かの夫婦ものの友だちを選んで、一緒にテニスをやったり食事をしたりもした。

「彼」の結婚生活には、本当に、「何ひとつとして問題はなかった」のであろうか。夫婦関係という人間関係は、プールや会社の中と同じように、関係の水面上を泳ぐだけで保たれるものであろうか。「結婚の約束をさせられるまで深く、一人の女の子とつきあうこともなかった」という学生時代の「彼」。プールの外の人生もプールの中と同じように泳いでいた「彼」に、女性関係においてだけ認識の変化が訪れたのであろうか。会社の中で、「分割方式」という認識に基づいて「フルスピードで泳ぐ」ことによって、「30になる前」に既に「実質的には重役の権限を持つ」ようになった「彼」、その「彼」が二十九歳で結婚したという設定。「すべては彼の計算どおり」、「心の底」に降り立つことで初めて取り結ばれる結婚という心行為も、「彼」にあつては、設計した人生のスケジュールを機械的にこなしていくひとつの節目でしかなかったのである。結局のところ、「彼」は人間関係の表層を泳いでいるだけであり、結婚は、「50メートル・プール」の中でのターンと同じ通過点に過ぎなかったのだ。

10分後に妻がアイロンかけを終えて彼のそばにやってきた時、彼はもう泣きやんでいた。そしてクッションは裏がえしにされていた。彼女は彼の隣に腰を下ろし、客用の布団を新しく買いかえたいのだけれど、と言った。彼としては客用の布団なんてどうでもよかったから、君の好きなようにすればいいと答えた。彼女はそれで満足した。二人はそれから銀座にでかけて、フランソワ・トリュフォーの新しい映画を観た。

それほど感心する音楽とも思えなかったが、それをもう一度聴いてどんな気持がするものなのか、彼は試してみた

かったのだ。

「どうしてビリー・ジョエルのLPなんて買う気になったの？」と妻が驚いて訊ねた。

彼は笑って、答えなかった。

「彼」の『プールサイド』の話を「どうしても誰かに聞いてもらいたい」という切実な心から流された涙であるはずだが、「彼」はその涙、その心を妻には隠すのである。妻と交わすのは「彼」にとつてはどうでもよい雑事だけ、後は何事もなかったかのように街に出掛けるのである。「ビリー・ジョエルのLP」を買う真意を妻に答えることすらしない。人間性の相互理解の上に成り立つ関係、「心の底」を曝け出す関係が取り結べていたわけではない。「彼」はそういう生きた人間関係を求めているなかったのである。「彼」の夫婦生活とは、妻とともに都会の表層を浮遊すること、青山のレストランでの食事、銀座の映画館での映画鑑賞をともにすることであつたに違いない。したがって、「彼」の意識の上では、確かに「何ひとつとして問題はなかった」であらう。

二人はコンサートのあとで酒を飲み、そして寝た。彼女は独身で旅行代理店に勤めていて、彼の他にもボーイフレンドが何人かいた。彼女の方にも彼女の方にも、お互いにこれ以上深入りするつもりはなかった。二人は一カ月に一度か二度コンサート会場で待ちあわせ、そして寝た。妻の方はクラシック音楽にはまったく興味を持たなかったのです。彼のおだやかな浮気は露見することなく二年つづいていた。

夫婦関係において、「心の底」を見せず、都会の表層を一緒に浮遊することしか求めない「彼」が、「恋人」をつくつて「寝た」としても少しも不思議ではない。「結婚して二年め」に「もうそれほど若くはない」と感じて、プールの中で同じように、「分割方式」のやり方で、節制と運動をすることで若返り、「そして彼は恋人を作った」のである。会社の中で努力することで、権限と高収入を勝ち取ったのと同様に、若返る努力によって、身体の若返りとおまけとしての「恋人」

を得たに過ぎない。「恋人」に何人かのボーイフレンドがいることに嫉妬することすらない。「恋人」というよりも、「深入り」する情熱のないセックス相手というべきであろう。「恋人」との「浮気」が「露見」さえしなければ、「彼」の夫婦関係意識には、「何ひとつとして問題」はないのである。結婚後も、大学時代の、「遊び相手に不自由したこともなかった。結婚の約束をさせられるまで深く、一人の女の子とつきあうこともなかった」といった女性関係を継続させていたに過ぎないのだ。心のどこかでは夫婦生活の空虚さを感じていたかも知れないが、「彼」の意識の上では、とにかく、「何ひとつとして問題」はなかったであろう。

これが彼にとつての前半の人生、35年ぶんのあちら側の人生だった。彼は求め、求めたものの多くを手に入れた。努力もしたが、運もよかった。彼はやりがいのある仕事と高い年収と幸せな家庭と若い恋人と頑丈な体と緑色のMGとクラシック・レコードのコレクションを持っていた。これ以上の何を求めればいいのか、彼にはわからなかった。順風満帆な人生行路の頂点にいうとよいのだが、「彼」はその恍惚感に酔い痴れているのではない。むしろ、その空虚感に混乱しているのだ。何故であろう。「彼」が自ら決めた人生の〈折りかえし点〉をターンしたことと無縁ではないが、何かを感じたからこそ、〈折りかえし点〉をターンしようと決心したはずである。

「彼」はプールから外に出て、作品の題名である〈プールサイド〉に立っているのだ。いや、「彼」はプールで泳ぐことを止めたわけではない。プールの中で泳ぐ自分を、〈プールサイド〉から眺めているのである。言わば、自分の背中を自分で見ているのである。〈プールサイド〉という位置は、「彼」に考える時間を与えたのである。

上からじっと見下ろしていると、そのプールは少しずつプールとしての現実感を失いつつあるように僕には感じられた。おそらくプールの水が透明すぎるためだろうと僕は思った。プールの水が必要以上に澄んでいるせいで、水面と水底とのあいだに空白の部分が生じているように見えるのだ。プールでは二人の若い女と一人の中年の男が泳いで

いたが、彼らは泳いでいるというよりは、まるでその空白の上を静かに滑っているかのようだった。

無論、このの主体は「僕」である。プールに注がれているのは「僕」の視線である。しかし、「プールサイド」のカフェテラスで、「僕」に打ち明け話をしている「彼」もまたプールに眼を向けていることは確かである。話す「彼」に同一化した聞く「僕」、「僕」は「彼」の視線に便乗しているに過ぎない。「プールサイド」からプールを本来的に眺めているのは「彼」である。「彼」の人生の表徴としてのプール。「透明すぎる」水、「必要以上に澄んでいる」水は、あまりにも明晰に割り切りすぎた「分割方式」という「彼」の認識方法を意味しているであろう。「人生にとっていちばん大事なことはきちんとした形をとった認識なのだ」という信念を持つ「彼」のその認識が、あまりにもきちんとし過ぎていたために、「彼」が泳ぐプール（人生）は、「水面と水底とのあいだに空白の部分が生じている」ように見え、「プールとしての現実感を失いつつある」ように感じられるのである。「分割方式」によつて「フルスピード」で泳ぐことで、「彼」は「彼」の人生を空白化、非現実化してしまっているのである。「現実感を失いつつある」その嘘っぽい人生の中を泳いでいる、いや、「泳いでいるというよりは、まるでその空白の上を静かに滑っているかのよう」な「二人の若い女」と「二人の中年の男」、それは、「彼の妻と」「恋人」と「彼」自身であることは見易い。

人生の「折りかえし点」をターンしようとし決心させたもの、「プールサイド」に立つて、泳ぐ自分の背中を見させたものは何であつたのか。『プールサイド』の中の、ゴシック体で書かれたふたつのフレーズ、「そしてこれで半分が終つたのだ」と「俺は老いているのだ」は、どちらも「彼」の〈老い〉の意識に深く関わっているのである。「もうそれほど若くはない」と彼がはじめて、認識したのは結婚して二年めの春だった。「贅肉がこびりついた身体に自己の〈老い〉を感じたのである。しかし、「彼」は自己の身体をも、あの「分割方式」によつて自己管理しようとしたのである。

彼はまず歯医者に行つて徹底的な歯の治療をし、それからダイエット・コンサルタントと契約して総合的なダイエツ

ト・メニューを作成した。

一日20分から30分のきちんとした体操、そして適度のランニングと水泳、それで十分なはずだ。

身体的な〈老い〉を先送りするための周到な設計図。ここでも「すべては彼の計算どおり」、「彼」は強い克己心で設計図どおりに泳ぎきり、贅肉を削ぎ落とすことに成功したのである。成功した身体的な〈老い〉の先送りは、しかし、別の〈老い〉を「彼」に痛感させることになったのである。「醜い中年男」になることを回避することで手に入れた「恋人」との情事。

彼はその情事を通じてあるひとつの事実を学ぶことになった。驚いたことに、彼は既に性的に熟していたのである。彼は33歳にして、24歳の女が求めているものを過不足なくきちんと与えることができるようになっていたのである。

これは彼にとつての新しい発見だった。彼にはそれを与えることができるのだ。どれだけ贅肉を落としたところで、彼はもう二度と若者には戻れないのだ。

身体的な〈老い〉を先送りすることで思い知らされた成熟、精神的な〈老い〉とでも言うべきか。「分割方式」の認識によっても防ぐことのできない性的成熟、心の経験的な部分の〈老い〉、「彼」は確実に老いているのであり、「若者」には戻れないのだ。しかし、「彼」に「分割方式」によっても意のままにできないことがあることを思い知らせたのは、やはり、身体的な〈老い〉であつた。身体的な〈老い〉は先送りすることはできても、根本的に回避することは不可能なのである。「彼」の体を「ゆっくりと覆っていく宿命的な老いの影」。

どれだけ努力したところで、人は老いを避けることはできない。(中略)年を取れば取るほど、払われた努力の量に比して得ることのできるものの量は少なくなり、そしてやがてはゼロになる。



「求め、求めたものの多くを手に入れ」てきた「彼」、「分割方式」の認識に基づく努力によって神のごとくにすべてを可能にしてきた「彼」。そのような「彼」にも不可能であつたこと、それこそが「古い」を押し止めることであつたのだ。「きちんとした形をとつた認識」によつても操ることのできない「古い」、「古い」は「宿命的」なのだ。全能的に思えた「きちんとした形をとつた認識」の不完全性を「彼」に教えたものが「古い」だったのであり、それは「彼」の人生観に変更を促す重要な契機であつたのだ。「そしてこれで半分が終つたのだ」、「俺は老いているのだ」というフレーズがゴシック体で書かれる所以である。

『プールサイド』の話を「どうしても誰かに聞いてもらいたい」という思いに駆られる「彼」の「混乱」、それは、無論、「年老いること」への恐怖に由来するものではない。「分割方式」の認識によつて「フルスピードで泳ぐ」という「彼」の身にしみついた信念が揺らいでいるのである。「彼」が生まれて初めて感じたという「名状しがたい把握不能の何か」、それは、「彼」の信念の限界性、不完全性と言つてよいであろう。いや、むしろ、プールの外の人生には、「彼」の「分割方式」という認識では割り切れない曖昧な部分、到達不可能な奥行きがあるという不安感・混乱と言うべきかも知れない。「50メートル・プール」を泳ぐことと人生を生きることとは同じではなかつたのだ。人生をもプールの中と同様に泳ごうとして、人間関係の表層だけを駆け抜けてきた「彼」自身の滑稽さに気づいているのである。「回転木馬の上で仮想の敵に向けて熾烈なデッド・ヒートをくりひろげている」滑稽さであり、哀しさでもある。

夜中に一人でブルックナーの長大なシンフォニーを聴くたびに、彼はいつもある種の皮肉な喜びを感じた。それは音楽の中でしか感じるることのできない奇妙な喜びだつた。時間とエネルギーと才能の壮大な消耗……。

ブルックナーのシンフォニーとは、人生をプールの中と同じように泳いできた「彼」自身の「前半の人生」の象徴に他ならない。「これ以上の何を求めればいいのか、彼にはわからなかつた」というほどに満足すべきはずの人生、しかし、そ

れは、「時間とエネルギーと才能の消耗」としか思われないのである。「彼」自身の『デッド・ヒート』に、「皮肉な喜び」を感じる他に術はないのだ。

したがって、『プールサイド』の話の「中心にあるある種のおかしみ」とは、人生をもプールの中と同じように「ブルスビード」で泳いできた「おかしみ」、人生を「50メートル・プール」と同一視した「おかしみ」である。プールと人生が違ふことに気づいた「彼」の混乱は深いのだ。プールの中と同様に生きてくることで失ったものの数々、その大きさに気づくことでもあったからである。両親の離婚以来、「彼」が回避してきた生きた人間関係。「心の底」に降り立つ人間関係。それを追い求めることなくしては、「心の底」から満ち足りることはできないことが分かったはずである。だからこそ、「僕」が「この話」を書くことで、「恋人」のことがばれてもいい、と「彼」は言い切ることができるのである。「そんな風に誰かをだましたり利用したりしながら残りの人生を生きていくたくなはないんだ」、「折りかえし点」をターンした「後半の人生」において、「心の底」に降り立って、生きた人間関係を求めようとしているのだ。

#### 4 『今は亡き王女のための』—— 損傷を受けたエゴ

『回転木馬のデッド・ヒート』の諸篇は、例えば、「僕」が一度だけインタビュした女性（『タクシーに乗った男』、旅先で目礼を交わすだけの男性（『ハンティング・ナイフ』）といった、「僕」と関係の薄い人物が抱え持つ体験を「僕」が聞くという設定になっており、だから作品で中心化されているのもその語られた他人の話である。しかし、『今は亡き王女のための』だけは例外的な設定の作品と言わざるを得ない。作品の後半は、確かに、「彼女」の夫という関係の薄い人物から「彼女」にまつわる話を聞くわけであり、その意味では、『今は亡き王女のための』も『回転木馬のデッド・ヒート』諸

篇と同じ趣向の作品だと言える。しかし、この作品では、前半部分の、話者を介在させない、「僕」と「彼女」との直接的な関わりあいのほうが中心化されているのである。「彼女」の夫から話を聞く後半部分は前半部分の後日譚と言っても過言ではない。

僕はまだ彼女に電話をかけていない。彼女の息づかいと肌のぬくもりとやわらかな乳房の感触はまだ僕の中に残っていて、そのことで僕はまだ十四年前のあの夜と同じように、どうしようもなく混乱しているのだ。

作品の末尾である。『今は亡き王女のための』において主題化されているのは、「僕」の「どうしようもない混乱」であつて、「僕」の眼前の話者やその話者の物語の中で中心化される人物の抱え持つ問題ではないのだ。話者から話を聞くのは、「僕」の在り方を提示するための契機に過ぎない、と言つても過言ではない。聞き手に後退したかのように見せて、その実、「僕」の抱え持つ「混乱」を主題化させる後半部分と、眼前の話者を介在させることなく、「僕」の直接的な経験を語る前半部分は通底しているであろう。『今は亡き王女のための』の実質的な主人公は「僕」であり、「僕」は聞き手の位置からせり出してしまつているのである。

作品の前半部では「僕」から見られ、後半部では夫によつて報告される「彼女」、形の上では主人公の座を獲得しているかのような「彼女」、しかし、「彼女」が自分の内面を自ら吐露することは一度もない。客体化された、見られ、語られる人物。

僕は一目見たときから、彼女が嫌いだった。僕は僕なりにスポイルされることについてはちよつとした權威だったので、彼女がどれくらいスポイルされて育ってきたか手にとるやうにわかつた。

他者の本質的な人格、その致命的な欠陥が「手にとるやうに」分かる、ということはある得ないことではない。同一的な人格（「とりかえしのつかないまでの損傷」を受けた「エゴ」）を持つ者同士の場合はなおさらである。「スポイルされて

育つ」た者同士という同一性を分かち合う「僕」と「彼女」、とひとまずは言っておこう。

ところで、村上春樹は、『村上春樹全作品⑤』（講談社、一九九一年一月）に収録する際に、先に引用した部分の「彼女が嫌いだつた。」という箇所を、「彼女が苦手だつた。」というふうに書き換えているのである。「彼女」への嫌悪感を薄めているだけでも言えるが、しかし、「僕」の「彼女」への意識の微妙さ、揺れが垣間見えていることは間違いない。「僕」の語り、「彼女」への意識はアンビバレントなのだ。「ただ単に不快なだけだつた」、「ひどく嫌いだつた」、「すっかりうんざりしてしまつた」……、「僕」は、意識的には、「彼女」への否定的な感情、嫌悪感を語りだそうとしているのである。しかし、その語りはしばしば揺れるのである。嫌悪感の後退に止まるものではない。

たしかに彼女はたいていの男が夢中になつてしまふようなタイプの女の子だつた。僕だつてもう少し違つた状況で出会つていれば、一目で彼女に熱をあげていたかもしれないと思う。

僕は彼女の人柄については好感を持つて見てはいなかつたけれど、それでも彼女の微笑み方だけは好きだつた。とにかく何はともあれ好きにならないわけにはいかないのだ。

「嫌い」、「不快」を述べ立てるのは、「僕」の理性であつて、「僕」の心はそれとは裏腹に「彼女」への強い好意を語つてしまつていゝるのではあるまいか。理性を感情が裏切つていゝる、と言つてもよいのだが、心の奥底で「彼女」に強くひかれていゝることは間違いない。「僕」は「彼女」への愛を語つてしまつていゝるのだ。「あたたかな春の日だまり」に例えられる「彼女」の微笑み、それに深くとらえられていゝることこそが、若者における恋愛感情の発動と言ふべきではなからうか。若者の恋愛においては、相手の「人柄」への理性的な評価は、微笑みの魅力の前に無力なのが一般的なのだ。「嫌い」を表立つて言うのは、愛情関係においてよく見られる逆説的な表現と見ることもできよう。

「好き、嫌い」のアンビバレントな心情を抱きながら、意識的には、「嫌い」を述べ立てる「僕」、しかし、実は、そこには大きな枠組みがはめられていることを忘れてはならない。

その当時僕は若かったのだ（まだ二十一か二だった）、僕は彼女のそんな性向をずいぶん不愉快に感じたものだった。今にして思えば彼女はするように習慣的に他人を傷つけることによって、自分自身をもまた傷つけていたのだらうという気がする。そしてそうする以外に自分を制御する方法が見つからなかったのだらう。（中略）そのエゴを放出してやれば、彼女もずっと楽になったはずなのだ。彼女もやはり救いを求めていたはずなのだ。

でも彼女のまわりには彼女より強い人間なんて誰一人としていなかったし、僕にしたところで、若いころはそこまでするのがいけない。ただ単に不快なだけだった。

若さゆえの狭量、人間的未熟の強調。「彼女」を「不愉快」、「不快」に思ったのは、「僕」が若くて未熟だったからなのだと言っているのである。他人の内面的な痛みを推し量る思慮が欠けていたからなのだ。語っている現在（三十代半ば）の視点を導入することで、「彼女」を嫌う自分の自己否定を行なっているのである。「彼女」を嫌う「僕」の非自己化とも言うべきか。否定されているのはむしろ「僕」自身である。しかし、「僕」の自己否定によって、相対的に「彼女」が肯定されるわけではない。「とりかえしのつかないまでの損傷」を受けた「エゴ」によって、他者を傷つける暴力性を抱え持つ存在であることには変わりはないのである。若かった「僕」は、その淵源に眼を向けることができなかったのだ。「降りることも乗りかえることもできない」、「損傷」を受けた「エゴ」という「回転木馬」の上で、「仮想の敵に向けて熾烈なデッド・ヒートをくりひろげている」苦しみを思いやることができなかったのだ。

ところで、三十代半ばの「今」にして思う、「彼女もやはり救いを求めていたはずなのだ」との思いにふと漏らされている、「僕」自身の内面の苦痛。「彼女も」の「も」は、救いを求めているのは「僕」でもあることを表しているであらう。『今

は亡き王女のための』においては、「彼女」への不快感を述べ立てる語りに傾斜していて、「僕」の内面は作品の末尾に至るまで大寫しにされることはない。作品の末尾で憚りなく吐露される「僕」のどうしようもない「混乱」、「僕」は何故この心の苦しみを述べ立てないのであらうか。私は先程、「僕」と「彼女」を同一人格を持つ者同士と言っておいたが、もう少し踏み込んで、同一存在と言えないのであらうか。同一存在といつても、無論、互いに異なる存在（他者）として設定されていることを無効にしようというのではない。互いは互いの鏡だと言うことが可能だろう。内面を可視化する魔法の鏡。「僕」という鏡に写ることその本質的な姿を露呈する「彼女」と、「彼女」という鏡に写ることその本質的な姿を露呈する「僕」。「彼女」とは「僕」を写しだした鏡、「僕」を可視化した鏡である。その意味で、「彼女」とは「僕」の本質的な姿でもあるのだ。だから、「彼女」の本質的な有り様をデッサンして見せることによって、「僕」の正確な自己像を提出しているのだとも言える。「僕」を非自己化して、「僕」の否定的な側面を「彼女」に投げ掛けているのだと言ってもよい。「彼女」と「僕」の重なり。「彼女」への嫌悪と愛着のアンビバレントな感情は、自己嫌悪と自己愛とが入り交じる自己感情にきわめて似ているであらう。

彼女には決まった特定の恋人がいなかったのだ、グループの中の男が三人ばかり（中略）彼女に熱をあげていた。彼女はとくに相手を誰と決めるわけでもなく、その場その場に依じてうまくその三人の男をあしらっていた。

「彼女」の「王女」的な振る舞いを語っているのであるが、その淵源にまで眼を向けた深層的な語り、「今」の視線に裏打ちされた語りではあるまい。「彼女」は「王女」の陽性の攻撃的な振る舞いをしていたわけではないからである。「特定の恋人」を定めることなく、複数の男性をあしらっているように見える「彼女」。「彼女」の心の奥底には何が渦巻いていたのであろうか。他者から等距離に身を置き、他者との距離をゼロ化しない内面的な戦いをしているのだ。「損傷」を受けた「エゴ」がそれ以上の「損傷」を被らないようにする自己防衛。「特定」の他者との距離をゼロ化することには、「損傷」

を受けた不定形な「エゴ」は耐えられないのである。他者に踏み込み、他者から踏み込まれることができないのだ。「彼女」のこのような人間関係は、無論、生きた人間関係とは言えないわけであるが、生きた人間関係を持ってない苦しみ既に疲れ果てているのが「彼女」自身なのである。

「僕」は「彼女」を先回りした敗残者だと言うべきであろう。「女の子との関係が妙にこじれたせいで下宿を追いだされる羽目になって、それで友だちのアパートに転がりこむことになり、スキーもやらないせにわけのわからないスキー仲間のグループに受け入れられ」た「僕」。「損傷」を受けた「エゴ」を抱え持ちながら、他者との距離をゼロ化してしまい、「特定」の「女の子」を内に招き入れた「僕」は、その関係性そのものによって、「エゴ」がより大きく「損傷」されて「混乱」に陥っていたのである。生きた人間関係を持つとしたがゆえの「混乱」と言うべきである。「彼女」に心で強くひかれながらも、理性で、「不愉快」「不快」と思うことで、「彼女」から距離を置こうとしていたのだと考えられる。「もう少し違った状況」、つまり、「女の子との関係が妙にこじれ」て「混乱」していたという状況でなければ、「一目で彼女に熱をあげていたかもしれない」のである。

要するに酔払って雑魚寝をしていて、気がついたら隣りにたまたま彼女がいたというだけのことなのだ。よくある話だ。でも僕はその時のことを今でも奇妙なくらいはつきりと覚えていてる。

彼女の息づかいと肌のぬくもりとやわらかな乳房の感触はまだ僕の中に残っていて、そのことで僕はまだ十四年前のあの夜と同じように、どうしようもなく混乱しているのだ。

このふたつの引用部に言わばサンドイッチにされる形で語られるのが、「彼女」を「抱いた」といってもセックスをしたわけではなく、ただ単に物理的に抱いただけ」の体験なのである。だから、このふたつの引用部は、その体験の枠組み、意

味づけになっていると言えよう。「ただ単に」だけに過ぎない出来事であつたにもかかわらず、十数年後の「今でも」、「奇妙なくらいはつきりと覚えている」、しかも、どうしようもなく「僕」を「混乱」させ続ける体験。

逆に彼女はまるで僕の内側にすべりこむような格好で、僕の体にびったりと体をつけてきた。

彼女はずっと同じ調子で寝息を立てていたが、それでもおそらく僕のペニスの形態の変化を彼女はちゃんと把握していたのだらうと僕は思う。彼女は少しあとで、それがまるで眠りそのものの延長であるかのようにそつと腕をのばして僕の背中にまわし、僕の腕の中で小さく体の向きをかえた。おかげで彼女の乳房はもつとしっかりと僕の胸におしつけられ、僕のペニスは彼女のやわらかい下腹におしつけられることになった。

無意識を装った性的接近、偽装された眠りのなかでの性的な接近。理性面で「彼女」を「不快」に思っていた「僕」は、「彼女」のこの接近に「腹を立てて」いるのであるが、その意識をペニス（無意識）が裏切っているのである。「僕」のペニスは「硬く」なり、「膨張」していたのだ。「僕」のほうも、無意識を装って「彼女」の接近を受け入れる他ないのだ。「我々」はどちらも、まだぐっすりと眠ったふりをし、「我々は眠ったふりをしながら」、「損傷」を受けた「エゴ」を抱え持つ者同士は、偽装された無意識のなかでのみ接近を試みるのである。

僕は彼女のスカートの中に指をすべり込ませることを考えていたし、彼女は僕のズボンのジッパーをはずしてあたかいつるつるとしたペニスに手を触れることを考えていた。不思議なことに我々は、お互いの考えていることを手にとるように感じとることができた。それはとても奇妙な感覚だった。彼女は僕のペニスのことを考えていた。（中略）僕は彼女のスカートの中の小さな下着と、その中に包まれたあたたかなヴァギナのことを考えた。

距離のゼロ化の奥の欲望、ペニスとヴァギナを求める欲望。既に、「僕」の意識を裏切つて、「硬く」、「膨張」していた



ペニス。ペニス、ヴァギナは、意識のコントロールの及ばない何かの表徴であろう。「ずいぶん迷った末」に回避した、ペニスとヴァギナへの密着。「もしこれ以上に状況を押すすめていたとしたら、我々はのっぴきならない感情の迷路に追い込まれることになるんじゃないかという気がした」からだと言うのである。「降りることも乗りがえることもできない」「回転木馬」とでも言う他ない、「僕」と「彼女」の「損傷」を受けた「エゴ」、ペニスとヴァギナが象徴するものはこれをおいて他にはない。「本質的には奇型である」人間の「エゴ」の表徴がペニスとヴァギナである。

「僕は僕なりにスポイルされることについてはちよつとした権威だったので、彼女がどれくらいスポイルされて育ってきたか手にとるようにわかった」という「僕」だからこそ、ペニスとヴァギナを求め合う気持ちをも、「手にとるように感じ」とることができたのである。既に述べたように、「僕」と「彼女」は同一存在、「彼女」とは「僕」の否定的な側面（「損傷」を受けた「エゴ」を投影した存在である。「彼女」のヴァギナに、無意識的に共振してしまった「僕」のペニス。「損傷」を受けた「エゴ」に意識の上でも共振し、密着したとしたら、「のっぴきならない感情の迷路に追い込まれる」ことにならざるを得ないのである。

「何年か前にふとした偶然」に、「彼女」の夫を通して聞いた「彼女」の消息、雑魚寝の夜の「彼女」の言わば後日譚と云う他ない。「僕」の後日譚と言っても同じだが。「彼女」が結婚するということは、学生時代に複数の男性との間に置いていた距離を取り払って、距離をゼロ化したことを意味しているであろう。「特定」の男性と生きた人間関係を取り結ぼうとしたわけであるが、雑魚寝した夜の比喩で言えば、「損傷」を受けた「エゴ」（ヴァギナ）に「特定」の男性（ペニス）を招き入れたのだと言ってよい。「それでいろんなことが少しずつ狂い始めた」のである。「損傷」を受けた「エゴ」の奥深くに他者を招き入れたとき、「彼女」は深く傷つき、「混乱」し、「狂い始めた」のである。

「今は亡き王女」。しかし、「彼女」の身体の感触、「損傷」を受けた「エゴ」の周辺の感触は、「今でも」まだ、「僕」を

「どうしようもなく混乱」させているのである。

（これらの作品論を書くうえで、静岡大学の日本語文化基礎演習の授業の学生に教えられたところが多かったことを付記しておく。）